

# すぐに迎えに行くからね!: 緊急避難時の子どもの送迎

大森宣暁

OHMORI, Nobuaki

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻准教授

## 1—はじめに

子育て世帯にとって、保育園、学校、習い事などへの子どもの送迎は、日常生活における一連の子どもの世話の中でも、世帯内での調整や連携を必要とする重要なタスクである。例えば核家族共働き世帯では、平日朝夕の保育園への送迎は、夫婦間の連携プレーを必要とし、予め送迎時刻が決まっても仕事等とのスケジュール調整が困難な場合もあれば、突然の子どもの発熱で日中にお迎えの必要が生じることもある。昨年の東日本大震災発生時には、首都圏でも保育園や学校への子どものお迎えに苦労した親が多かったようである。主な交通手段が車である都市では、停電による信号停止で道路混雑が生じ、鉄道に依存した東京都心部では、鉄道の運休により両親とも帰宅困難者となるなど、保育園へ子どもを迎えに行くまでに何時間もかかった人も多かったと聞く。

本稿では、米国シカゴの住民を対象に、平常時と緊急避難時における子どもの送迎行動を分析したLiuらの論文<sup>1)</sup>を紹介する。

## 2—平常時と緊急避難時の子どもの送迎行動

平日の昼間に突然災害(原発事故、テロ攻撃、危険物質放出など)が発生し、避難の必要が生じた時、親は子どもを学校に迎えに行くなど家族一揃いの避難を試みるが、その自発的行動が社会全体としては混乱を招く可能性がある。そのため、世帯の送迎および集合行動を分析することが、突発的な災害に対する避難計画・管理にとって重要である。

既存研究によると、日常の子どもの送迎は、子育ての役割と同様、主に母親が担っている世帯が多い。母親が子どもの送迎をはじめ、家事を担う割合が高いのは、所得が父親に比べて相対的に低いことによる世帯内の最適化行動の結果であるとする報告もある。また、男女の家事の役割分担に関して、男性は仕事に支障が少なく時間的にも融通の利く家事を担当し、女性は炊事や子供/親の送迎など自由度の低い家事の多くを担っている、女性は高齢者や配偶者の世話より子どもの世話を楽しいものと考えている、などの知見がある。

一方、緊急避難時の子どもの送迎についてはデータが少なく、研究も十分ではない。しかし、災害時の避難行動の研究は

数多く、性別、年齢、学歴、世帯所得、世帯人数、子どもの有無などの特性が、避難行動の意思決定に影響することがわかっており、女性ほど、子どもがいるほど、高齢者がいないほど、高所得世帯ほど、世帯人数が少ないほど、少数民族でないほど、避難する傾向にある。本研究でも、個人・世帯特性が子どもの送迎行動に影響を与える重要な要因であると考えられる。

2008年7月から2009年1月にかけて、米国シカゴ都市圏において、計315人に対する対面式の構造化インタビュー調査を実施した<sup>注1)</sup>。日常の子どもの送迎行動以外に、二つの仮想的なシナリオに対して、避難場所、交通手段、家族の送迎に関する質問を行った。

- ・シナリオ1: 自宅は安全だが、職場からは5分以内に避難しなければならず、職場から5マイル以内にある子どもの学校も避難対象区域である。
- ・シナリオ2: 職場から5分以内に避難しなければならず、子どもの学校も自宅も避難対象区域であり、最低3日間は帰宅禁止。

サンプルの属性については、74%が18歳未満の子どもを持つ親であり、68%が女性、69%が既婚、11%が専業主婦(stay-at-home caregiver)<sup>注2)</sup>、37%がCaucasians、38%がヒスパニック系、70%が自分専用車を持つ。18歳未満の子どもを持つ親233人の48%が、平日に子どもの送迎を行っており、シナリオ2では57%の親が迎えに行くかと回答した。シナリオ1では、18歳未満の子どもを持ち職場から5マイル以内に子どもの学校がある親99人の74%が、子どもを迎えに行くかと回答した。平均送迎距離(職場または自宅から子どもの距離)は、平常時で7.23マイル、シナリオ1で2.23マイル、シナリオ2で6.29マイルであり、自宅と職場間の距離は8.35マイル(女性が7.0マイル、男性10.87マイル)である<sup>注3)</sup>。

インタビュー調査の中で、母親が子どもの送迎をどう考えているかに関する質問では、「娘の送迎が、娘と一緒に過ごせる唯一の時間である」、「今の仕事では娘を学校へ迎えに行けないので、早く終わる別の仕事を探している」、「家から歩いて近所の子ども達を学校へ連れて行くのは楽しい」などの興味深い発言が得られた。また、子どもを迎えに行くかと回答した割合は、母親が父親の10倍であった。しかし、世帯所得の低い女性は、高所得の働く女性よりも送迎を行わない傾向にあった。これは、①Logan Square地区で、祖父母や近所の人や友

人がボランティアで日常的に子ども達を学校まで歩いて連れて行ってくれるグループ、②シカゴ全域に広がる低所得の若い母子世帯で仕事の融通が利かないグループ、③比較的高所得の母親のグループという3グループの存在を反映している。

続いて、通常の平日、シナリオ1、シナリオ2の三つの状況で、子どもの迎えに影響を与える個人・世帯特性を検討するために、性別、世帯所得、民族性、車運転可能性、車利用可能性、通勤交通手段、専業主婦、年齢、学歴、職業、送迎距離、大人の数、車保有台数、18歳未満の子どもの数に着目して $\chi^2$ 分析を行い、さらに、子どもを学校へ迎えに行くか否かを被説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。

通常の平日のモデル、シナリオ2のモデルの両者とも、性別、職業、世帯所得、送迎距離の4つの変数が有意であり、女性ほど、無職ほど、世帯所得が高いほど、送迎距離が短いほど、迎えに行く確率が高い結果となった。ただし、シナリオ2では、男性の送迎距離は影響を与えない。一方、シナリオ1のモデルでは、性別、民族性、専業主婦、避難対象区域の子どもの存在の4つの変数が有意であり、女性ほど、Caucasiansほど、専業主婦ほど、避難対象区域に子どもがいるほど、迎えに行く確率が高い結果となった。

最後に、主な結論をまとめる。

- ・平常時および緊急避難時ともに、母親は父親よりも子どもの迎えを担う割合が高い。
  - ・緊急避難時、親は日常の送迎の役割分担に基づき対応を考えるが、父親も母親も、平常時と比較して自分で迎えに行く意思が強い。
  - ・親の居場所が子どもから遠い(5マイル以上)場合、車が利用できるほど子どもを迎えに行く傾向が強い。車利用可能性は世帯所得と相関が高いが、所得の影響の方が強い。
  - ・全般に、働く女性の職場は男性よりも子どもと自宅に近い。このことが子どもの世話の役割分担の性差に関連する。
  - ・親と子どもの距離が遠いほど迎えに行く傾向は低下し、緊急避難時には、子どもに近い親の方が迎えに行く傾向が強い。
  - ・世帯所得、民族性、学歴など、世帯の経済状況に関連する要因が子どもの送迎行動に影響するが、互いに相関が高い。所得の影響が最も強く、高所得世帯ほど平常時および緊急避難時ともに迎えに行く傾向が強い。
  - ・無職、特に専業主婦は、働く親よりも子どもの迎えを担う割合が高い。
- その他、以下の教訓が得られた。
- ・子どもの送迎は、子どもと過ごす楽しい時間でもあり、掃除などの他の家事とは異なるものと考えられている。
  - ・緊急避難時には、携帯電話が繋がらず夫婦間で連絡が取れなくても、父親・母親双方とも、平常時よりも学校や保育園に迎えに行く傾向が強いため、交通混雑などの問題をもたらす可能性がある。
  - ・学校や保育園の先生と親とが緊急避難時の対応について十分に話し合っておくことが重要である。

- ・緊急避難時の学校の送迎場所は、よりアクセスの良い代替地を検討することが有効である。
- ・緊急避難時の道路交通管理などの避難管理戦略においては、家族の送迎および集合行動を考慮する必要がある。

### 3—おわりに

紹介論文は、米国の事例であり、我が国とは日常の子どもの送迎の状況は異なるが、仮想的な状況下における対応を質問した調査とはいえ、大変興味深い知見が得られたものと思われる。我が国においても、大都市と地方都市など交通システムの状況に応じて、平常時の子育て世帯の子どもの送迎交通手段が異なるように<sup>2)</sup>、緊急避難時の送迎交通手段も異なることが予想される。子どもが二人以上いる場合に、「最も迎えに行く可能性が高い子ども」一人を対象に送迎行動を質問している点は、今回の調査方法の限界かもしれない。しかしながら、複数の保育園や、保育園と学童保育施設など、二カ所以上へ迎えに行く必要が生じる親も存在することを忘れてはならない。また、実際の災害時の行動調査が可能であれば、災害発生から迎えに行くまでの一連のコミュニケーションと意思決定の実態(家族や保育園と、いつ、どのような手段で連絡を取り、いつ、誰が、どうやって迎えに行ったか)を、調査・分析することも重要であろう。災害時緊急連絡用のメール配信システムやツイッターを導入している保育園や学校もあるが、効率的で不必要な送迎交通を発生させないためにも、その利用の仕方を検討することが大切である。少子高齢化が進行し、核家族世帯が増加する我が国において、親世帯との同居や近居はできなくとも、Logan Squareの例のように近隣コミュニティで子育てを支えることが一つの望ましい姿であろう。子育て世帯が外出しやすい交通システム、子育てしやすいまちづくり、といった視点を、都市・交通計画に携わる方々は、より意識すべき時代になったと思う。

#### 注

注1)うち80名は、メキシコやプエルトリコの移民が住み、鉄道やバスが便利なLogan Squareコミュニティ居住者で、スペイン語使用者である。

注2)調査データには専業主婦は含まれていない。

注3)子どもが二人以上いる場合には、(1)子どもを迎えに行く場合には最初に迎えに行く子ども、(2)子どもを迎えに行かない場合には、日中、親に近い方の子ども、というように、一人だけを対象とした。この子どもを、本論文では「最も迎えに行く可能性が高い子ども(the child most likely to be picked up)」と呼び、シナリオによって異なり、関連する指標(送迎距離など)も、この子どもに対して算出している。

#### 参考文献

- 1) Liu, S., P. Murray-Tuite and L. Schweitzer [2012], "Analysis of child pick-up during daily routines and for daytime no-notice evacuations", *Transportation Research A* 46, pp. 48-67.
- 2) 大森宣暁・谷口綾子・真鍋陸太郎・寺内義典・青野貞康 [2011], "子育て中の女性の外出行動とバリアに対する意識に関する研究—首都圏在住の乳幼児を持つ母親を対象として—", 『都市計画論文集』, Vol. 46, No. 3, pp. 259-264.